

北斎 百鬼見参

すみだ北斎美術館(墨田区) 前期 22.06.21~07.24 後期 22.07.26~08.28



古来、日本人は「鬼」の存在を信じ、暮らしにも取り入れて共に生きてきた。神話、伝説、芸能、小説、漫画、アニメ、ゲームに「鬼」が登場する創作物を数多く、それだけ「鬼」は日本人の心に深く根ざし、その精神世界の形成に大きな影響を与えている。そして古典能や江戸時代の読本を題材の「浮世絵」にも「鬼」は多く描かれている。

本展は、人気の錦絵「百物語」や版本らの「鬼」に関連する作品を紹介し、鬼才「北斎」がどのように「鬼」を捉えて表現してきたかについて迫っている。又、初公開の貴重な「北斎の肉筆画」と、画伯が描く様々な「鬼」が集結する迫力ある様を楽しむことができる。

<本展の見どころ>

1. 「北斎」や門人が描いた「鬼」にまつわる「浮世絵」を前期・後期合わせて「約145点」展示され、作品を通して、鬼才・北斎が「鬼」をどのように捉え、表現してきたかに迫る。
2. 怖い「鬼」、哀しい「鬼」、愛すべき「鬼」…
日本における多様な「鬼」の姿を描き出した発想力と筆力が見物である。
3. 「北斎」には珍しい「能」を題材にした「肉筆画」や本展のために修復された「道成寺図」が初公開されている。

葛飾北斎 《着衣鬼図》 1848年 紙本着色一幅



画伯が齢89歳の最晩年に描いた作品で、僧侶の法衣を着た赤鬼の手前には、刺身の載った皿と酒の入った染め付の徳利と数珠が置かれている。

僧侶にとって肉食と酒飲みは仏法で禁止されているものの代表であるが、肉食と酒は好物であった。

たとえ年老いても、画伯には隠居などありえず、本姓は死ぬまで「画狂人」であるという表明なのか。

葛飾北斎 《鬼とお多福面》



「鬼」は、節分や豆まきや神樂などの諸行事に頻繁に登場し、江戸時代の人々にとっては身近な存在であった。作品に新春を迎える節分に用いられる「お多面」が描かれていて、「鬼」の面のひょうきんな表情にひきつけられる。